

なかま新聞

なかま新聞
編集 新聞部員
姫路市北条宮の町
215番地
TEL079-287-1025

よみがえる白鷺城

～桜花に想う～

今年も桜の季節がやってきました。開花時期を予測し、桜が咲き始めたといえれば今度は何分咲きだ満開だと大騒ぎです。なぜ日本人はこんなに桜が好きなのでしょう。四季のある日本では厳しい冬を超えて春を迎え美しい花を一斉に咲かせ

る「生命の息吹」と、あつという間に散ってしまう「儚さ」を併せ持っているため愛されているのでしょうか。

「サクラ」という名前の由来は、春になると里にやってくる稲(サ)の神が憑依する座(クラ)だから「サクラ」という説があります。他にも桜の霊である木之花咲夜耶姫(このはなさくやひめ)が富士山の頂から最初の桜の花の種をまいて花を咲かせたので、姫の名前から「さくや」をとって

「桜」になったという説もあります。

でお酒を呑みドンチャン騒ぎをする「お花見」は日本独特のものだそうです。私も中学時代の同級生10人と姫路城でお花見をした思い出があります。以前はよく集まったものですが、だんだんと会う機会も減りました。今では懐かしい思い出です。

全国に桜の名所はたくさんありますが、やはり姫路城の桜は日本一だと思います。殊に今年には平成の大修理を終え、全国から観光客が訪れることでしょう。姫路駅や周辺の道路、みゆき通り商店街など整備され、街並みはすっかり昔と変わってしまい少し寂しく感じることもあります。しかし、青空をバックに凜とした美しい姿の姫路城を見ると、姫路市民であることを誇らしく思います。

昭和20年太平洋戦争末期、米軍の空襲で名古屋城や岡山城など7つの天守が焼失しました。7月3日の姫路大空襲で1万発もの焼夷弾が降り注いだ町は焼け野原となりましたが、奇跡的に焼け残った姫路城に人々は勇気づけられたということです。

昭和31年から8年がかりで昭和の大修理が行われました。築城以来初めて天守を完全に解体して再び組み直すという大規模な修理でした。平成5年には日本初の世界文化遺産に登録されました。そして平成21年から始まった平成の大修理では修理の様子を見学できる様に「天空の白鷺」が作られ、あけびの皆さんと一緒に見学しました。あんなに間近で天守を見ることができたのはとても良い経験でした。

これからも平和な世が続き二度と戦火に脅かされることなく、この美しい姫路城が後世に受け継がれることを願うばかりです。

長谷川 和宏



ブルーインパルス の 祝賀飛行 岩村和雄



最近、あけびで興味を持たれる時間に「脳トレ」がある。

先日もその時間に果物の漢字に読み仮名を書き込むプリントが配布された。難易度が初段や2段返はどうにか読めても、3段や4段になると難しい。3段の最初に出てきた漢字が「木通」。答えはなんと「あけび」だとのこと。どこから見てもあけびとは関係のない漢字だ。まして私共日頃お世話になっている「あけび」の漢字であるとは・・・。

家に帰ってこの話を娘にすると、すぐにパソコンで調べてくれた。あけびの語源は、実が熟すと果皮が裂けることから、「開け実」が転じたとする説が妥当であり、漢字の「木通」の由来はあけびの蔦を切って吹くと空気が通ることからで、本来はあけびの木部を表す言葉だということが解かった。

これは一つの言葉の出会いだが、「脳トレ」という時間があったからこそこの思いがする。今後ともこのような機会を大事にして、解からないことを貪欲に自分のものにする楽しみを味わいたいものだ

岩村 和雄

中間の吉

ブルと過ごした日々

寺下 典子

生後二カ月のパグ犬と出逢い、十七年間に共に過ごしましたが、三月六日永遠の別れとなりました。

いつもより目覚めが遅いなど、のぞいて見るとやすらかな眠り姿で体は冷たくなっていったのです。

そして、今は写真の中で愛らしいポーズで私共を見つめてくれます。

わが家での居心地は満足だったかな？楽しませてくれて、そして癒され本当にありがとうネ。大好きだったよ。



おばあさんの思い出

井上 信恵

私が子どもの頃は、神戸に住んでいました。おばあさんが曾根に住ん

でいましたので、時々遊びに行くことを楽しみにしていました。

やさしくて物知りなおば

あさんは、日本の歴史や戦争についてよく話をしてくれました。また、姫路城へ何度か連れて行ってくれその度「お菊虫」をみやげに買ってくれたことが心に残っています。

春になると一緒によもぎ摘みに

出かけました。摘みたてのよもぎで、おばあちゃんの作ってくれる「よもぎだんご」は、格別の味がしました。

大好きなおばあちゃんの思い出は、私の心を春の陽ざしのように温めてくれます。

(注「お菊虫」とは、ジャコウアゲハの幼虫のこと、お菊さんが囚われている姿に似ているところから、このような名前が付けられたと言います)

「男の勲章」

三好 徹

私が丁度四十歳だった平成元年のこと。「姫路市制百年シロトピア博覧会」が開催されました。

その主要な行事として、「ザ・姫路まつり」が催されました。私は、

地元の飾磨・須加地区の祭礼実行委員長に選ばれ、この行事に参加することになりました。



初めての行事であり、全てにおいて手探り状態でした。何をどれだけ準備すればいいのか、屋台を無事に大手門通りまで移送できるだろうか。そして、怪我人を出さないようにしなければ等々、人にはいえない苦労がありました。

余りの心労で、夜も眠れず、家族には大変な気遣いをさせました。

ですが、地域の皆さんや家族の協力を得て無事に当日を迎えることが出来ました。

当日の五月四日は、好く晴れて大勢の見物人で賑わっていました。大手門通りから姫路城の三の丸広場までを屋台巡行が繰り広げられ、私はその中の一台に乗って「ヨイヤサー」と、大声を張り上げていたのです。

この一大イベントの姫路のまつりのまん中に居る播州飾磨の男に生れたことを誇りに思いました。無事に終えた後の達成感、安堵感、そして支えて貰った皆さんへの感謝の気持ちで一杯でした。

「アポロ号」

西尾 要

私が警察犬の訓練士を始めて五年が過ぎた頃に出会ったのが、とてもやんちゃな生後二ヶ月の雄のシエパード「アポロ号」でした。当時、警察犬のコンテストで入賞するのは、関東がほとんどでしたから、関西からチャンピオンを出すことが悲願でした。

基本的な訓練はもとより体格も審査の対象となるため、毎日、手柄山を走って登り、死にもの狂いで訓練を続けました。その結果、見事に関西初のチャンピオン犬となったのです。

その後も多くの犬を訓練してきましたが、こんなに素晴らしい犬には出会えませんでした。「アポロ号」との日々は決して忘れることのない思い出となっています。

